

# きべりはむし

## 第15巻 第2号

### 目 次

ムラサキツヤハナムグリとミヤマオオハナムグリについて	高橋 寿郎	31
宝塚市安倉上池のトンボ	新家 勝	43
カトリヤンマの産卵観察例	田中 稔	48
ウスバシロチョウの採集	掘 紳二	49
西宮市でウスイロコノマチョウを採集	田中 稔	50
オオムラサキ絶産になるか	東 正雄	51
ヒロオビミドリシジミの保護	東 正雄	52
三木市のオオマルマメエンマムシの記録	沢田 和宏	53
姫路でセマルケシマグソコガネを採集	沢田 和宏	53
ヤマトアオドウガネの採集例	田中 稔	54
シロチビコブカミキリ六甲山にて採集	高橋 寿郎	55
ヤノトラカミキリの記録	高橋 寿郎	57
ツヤハダクワガタ氷の山に産す	高橋 寿郎	57
県内学会誌・同好会誌・連絡誌紹介		

会 員 異 動

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1987年11月

## ムラサキツヤハナムグリとミヤマオオハナムグリについて\*

高橋 寿郎

ムラサキツヤハナムグリ *Protaetia cataphracta* Arrow, 1913 とミヤマオオハナムグリ *P. lugubris insperata* (Lewis, 1879) 2種のハナムグリは共にそれ程多くいる種ではないようである。

ムラサキツヤハナムグリの方は兵庫県下にも少ないながら分布しているが、ミヤマオオハナムグリの方はどうも西日本には分布してないのではないかと考えられている。そこで割合よく似ているこの2種の分布を中心とした報文を此処にまとめて見た。

ミヤマオオハナムグリ *Protatia lugubris insperata* (Lewis, 1879)

G. Lewis 氏により1879年に Hab. Yezo として *Cetonia insperata* として新種記載をされた (Ann. Mag. Nat. Hist. 5(IV):463). 同じ年同一著者による "Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago, London" の p.14 に No.1021, *Cetonia insperata* Lewis と収録されている。

さらに Lewis 氏は 1887年 "I took about thirty examples in Yezo. Vries Island, Chiuzenji, Nikko, Wada-toge are other localities for it" と本種に就いて記している (I.C., 19(5):198) (属名は *Cetonia*).

1887年 Schönfeldt, H.V. 氏の "Catalog der Coleopteren von Japan mit Angabe der bezuglichen Beschreibungen und der sicher bekannten Fundorte" (Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde 40: 31-204) の中で (p.111) *Cetonia insperata* Lewis—Nagasaki としている。本種の産地を Nagasaki としているのは明らかな間違いと考えられる。引用の時のミスではないだろうか。

1894年 松村松年博士は "北海道産鞘翅類" を発表され (動物学雑誌 第6巻 第65号) その p.90 に 133 *Cetonia insperata* Lew. プンブンと云うのを記録されている。これが日本人による本種の記録の始めてであると思われる。勿論和名も始めて与えられたものであるが プンブンと云うのはいささかいただけない。

その翌年即ち 1895年に同博士は "Catalogue of Coleoptera collected in Hokkaido" なる報文を發表しておられる (動物学雑誌 第7巻、第86号)。

その p.57, 149 にこんどは *Cetonia submarmorea* Burm. 花, オウハナムグリを記録されていて前年の プンブンはふくまれていない。この間の関連に就いて何等説明されていないのでどの様な種を意

味しておられるのかははっきりしいなが多分*C. submarmorea* は*C. cataphracta* のことを意味しているのではと考えている。

1898年Reitter E.氏はBest,-Tab(38)(Verh.Natur.Forsch.Ver.Brünn)の47p.に*Pachnotosia insperata* Lewis をJapan を産地に記録しておられる。

1911年松村松年博士は“Erster Beitrag zur Insekten-Fauna von Sachalin”(Tohoku Imp.Univ. Jour, Coll. Agr.4(1):1-145, pl.1,2)なる報文のp. 119に*Cetonia insperata* Lew.ムラサキオオハナムグリKorakoff,Solowiyofka, gesammelt in 5 Exempharenと記録しておられる。

1921年のS.Schenkling 氏によるW.Junk Coleop. Cat . Paars.72,Scarabaeidae:Cetoninae の中ではp.222,*Liocola insperata* Lewis, Japan.ab.marmoratoides Reitt.となっている。

1923年新島善直・木下栄次郎両博士は“こがむしに関する研究報告(第二)”を公表になられその中で(p.168-169)ムラサキオオハナムグリ*Liocola insperata* Lewisを記載された。産地にNagasakiがあるが外国文献からの引用とすればSchönfeldt 氏のものからであろうが之は前に述べた様に間違いだと思われる。新たに両博士は石狩国産3exs.(性不明)を記録された。写真で全形は紹介されているが♂交尾器の図は入っていない。

1927年横山桐郎・鹿野忠雄両博士は“南樺太産甲虫類”を公表になられた(動物学雑誌 第39巻、第459号、p.1-39)。その中で(p.38)、212 *Liocola insperata* Lewis ムラサキオオハナムグリが収録されているが産地の記入は無く分布として樺太、北海道、九州となり本州が入っていない。

1935年加藤正世博士が発表になった“主要金亀子科の分類(4)”(昆虫界 第3巻、第18/19号:343-344)の中で*Liocola insperata* Lewis ムラサキオオハナムグリ(樺太、北海道、九州)は収録されているが同博士著の1933年の“分類原色日本昆虫図鑑、第八輯 鞘翅目”の中には図説されていない。

1939年出版の三輪勇四郎・中條道夫両博士著の“日本産鞘翅目分類目録 Pars.5 金亀子虫科”では(p.87)*Liocola insperata* Lewisムラサキオオハナムグリ(樺太、北海道)、ab.marmoratoides Reitter(日本)が収録されている

戦前本種の図説は平山修次郎氏の原色甲虫図譜(三省堂)(1940)と江崎悌三・安松京三両博士の“原色日本昆虫図説”の2巻だけの様に思われる(平山氏のもは北海道札幌産1♂, 26-VI-1939で*Liocola insperata* Lewis ムラサキオオハナムグリとなっている。図からすれば、*P. cataphracta* の様にも思われる。分布は樺太、北海道、九州となっている)。

1941年に八幡英夫氏は“日本産*Protaetia*属の種に就いて(I, II)”(昆虫 第15巻、第2号:75-84, 第15巻 第3号:114-126)なる論文を発表された。今迄のものを整理してまとめられたものであるが、この論文では当時の状況からして材料が不充分的点もあったのかこれで同定がはっきり出来ると云うことはまだ無理のように思われる(分布地は新しく次の地点が加えられた。北海道一層雲峽、

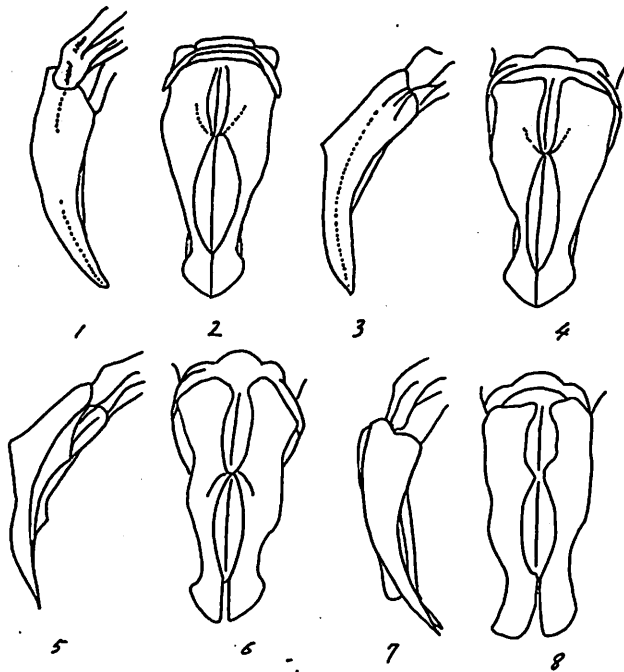
夕張、定山溪、樺太一豊原、突祖山、長野岩魚留、烏取大山)。

戦後になって1955年には伊賀正汎氏による“原色昆虫図鑑・甲虫編 増補改訂版(保育社)”にいち早く原色で図説された。ここで図説されているのは和歌山県高野山産(Ⅶ-1939)で*Protaetia insperata* ムラサキツヤハナムグリ、分布、北海道、本州、四国、樺太として示された。図が今一つはつきりしないのであるがどうも*P. cataphracta* の様に見える。

1959年に黒沢良彦博士はこの種はヨーロッパ大陸からアムール、北滿に迄分布している*P. lugubris* Herbst とその斑紋の特徴とか♂交尾器の形状などから区別することがむづかしいむね発表された(Bull. Nat. Sci. Mus. No. 44:339-340)。同時に本種は北海道では珍しくないが西日本あたりにいるものは*cataphracta* と中間的な特徴をもったものがあるとされている。

1960年野村 鎮氏は“List of the Japanese Scarabaeoidea(Coleoptera)”(Tōhō Gakuho No. 10:76)の中で*P. lugubris insperata*(Lewis) ミヤマオオハナムグリとされた。この和名は此処で始めてつけられたものでこの後この和名が用いられることになると思われる(分布は北海道、本州、四国、九州、樺太となっている。)

1964年Medvedev, S. N. 氏はFauan U. S. S. R. Sarabaeidae Vol. X, No. 5, Cetoniinae, Valginae を発表その中で*Potosia (Liocola) lugubris lugubris* はヨーロッパからウラル山脈をこえ西シベリア低地帯から東エニセイ川。東西サヤン山脈あたりまで分布していてそれより東ソビエト中央シベリアあたりから東サハリンまでと中国東北部に分布しているものを*P. (L.) lugubris orientalis* Medvedevと新亜種に記載しており*P. (L.) insperata*(Lewis)は日本に分布する種として独立種に扱っている(P. 181-186)。筆者はヨーロッパ産原亜種標本を有しないのでよくわからないが美しいカラー図説の“Iconographie Entomologique, Coléoptères, planche 6, Scarabaeoidea I(1978)”を見ると日本産のものとは外見では可成り違った印象を受けた(*Liocola lugubris* としている。八幡氏も樺太産は緑色型が多く北海道、本州のものには銅褐色型が多いと記しておられる)。またMedvedev氏は*lugubris*並びに*asp. orientalis*の♂交尾器を図説しているので日本産*insperata*と比較して見たら若干の相違はある様に思われた。したがってMedvedev氏の云う様に日本産は*P. insperata*として独立種扱いにしても良いのかもしれない。



Figs.1-8. Male aedeagus, lateral aspect and dorsal aspect.

- 1,2. *Protactia lugubris lugubris* (HRBST.)  
 3,4. *Protactia lugubris orientalis* MEDVEDEV (MEDVEDEV, 1964)  
 5,6. *Protactia lugubris insperata* (LEWIS)  
 7,8. *Protactia cataphracta* ARROW

日本ではその後次の様に図鑑類に図説されている。1963. 野村 鎮、原色昆虫大図鑑 第2巻(甲虫編) (北隆館) (pl.68, f.7, p.135) ミヤマオオハナムグリ *P. lugubris insperata* 6-7月本州ではやや高地に産するとして分布として北海道、本州、四国、九州とされ樺太が入っていない。

1975. 林 長閑、学研中高生図鑑② 昆虫II [甲虫]。ミヤマオオハナムグリ *P. lugubris insperata* (p.76, 397)。分布。北海道、本州、四国、九州。

1984. 黒沢良彦、渡辺泰明、野外ハンドブック 12. 甲虫 (山と溪谷社)。ミヤマオオハナムグリ、北海道~九州。学名は無く各種に就いての解説は無いが非常にきれいな原色図で楽しませてくれる。

1985. 林 長閑。決定版 生物大図鑑 昆虫II 甲虫。ミヤマオオハナムグリ *P. lugubris* Herbst. 分布は北海道、本州、四国、九州となっている。

1985. 黒沢良彦。原色日本甲虫図鑑 (II) (pl.74, f.14, p.411)。基亜種はヨーロッパ産で日本およびサハリソ産は亜種 *P. l. insperata* に属し従来西日本産の本種と考えられていたものはすべて *P. cataphracta* ムラサキツヤハナムグリであるとされている。従って本種の分布は北海道、本州、サハリソとなっている。

以上の様な経緯で現在にいたっている。ヨーロッパとかシベリア、樺太産の多くの標本を見る必要

もあるし日本産の本種の標本にしてもそれ程多く見ていない現在、今一つはっきりしない点が多くある。

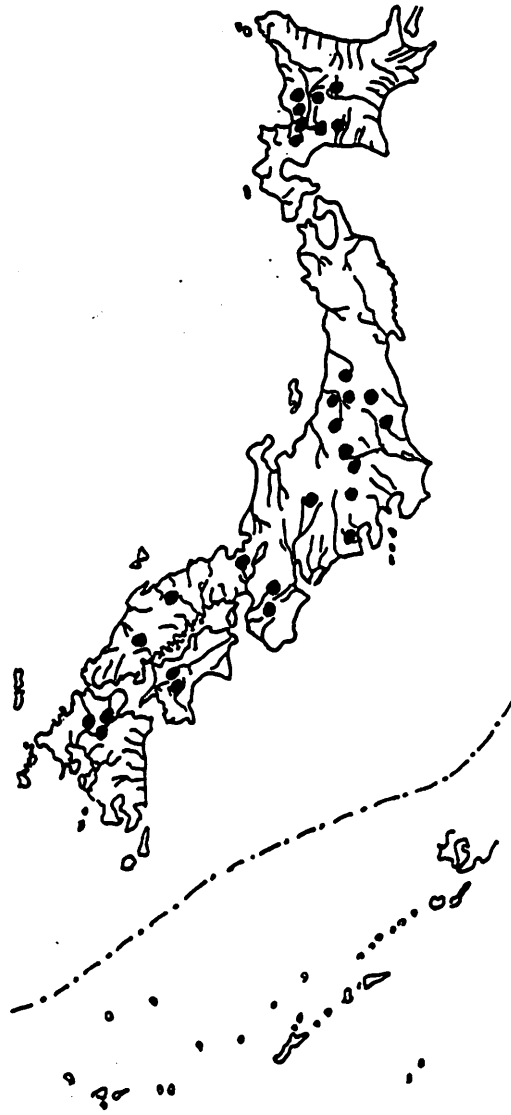
本種の従来の文献上からの分布をひろって見ると割りと西日本からのものもある。これらが正しく同定されているのかどうか（少なくとも♂であれば交尾器による区別はやや適確に出来そうであるが—）（筆者所有のミヤマオオハナムグリ2♂8♀、ムラサキツヤハナムグリ2♂6♀を比較した場合はまぎらわしいものは1頭も無く明らかに外観でそれとわかる位の違いはある。ムラサキツヤハナムグリの方が赤銅色と云うか紫色を呈してやや細長い。ミヤマオオハナムグリの方は暗銅色、赤銅色で少し方形と云うかがりしした形状をしている。尚文献上では見られなかったが筆者の所有ミヤマオオハナムグリの中には藤岡昌介氏の御好意で御恵与頂いた秋田県産の1♂1♀がある。1♂, Aki-nomiya Ogochi Akita Pref. 20-VI-1981, H. Kano leg. 1♀ Yuze Kazuno Akita Pref. F. Sato leg., 26-VII-1986）。

黒沢博士は従来西日本産と考えられていたミヤマオオハナムグリはムラサキツヤハナムグリであると述べられている（西日本産は暗銅色のものが多いと云うるのであるが、筆者はこの様なムラサキツヤハナムグリは見たことはない）、実際にはミヤマオオハナムグリはどのあたり迄分布している種なのであろうか、もっと詳しくそして多くの個体を調べて見なくてはいけない様に思われるがどんなものであろうか。本種の生活史の様なもの残念ながら見られなかった。ヨーロッパにいる*P. lugubris*の方の幼虫に就いてはMedvedev S.N氏の図説がある(1952)。

大変たよりないのであるが標本が見られない以上止む得ず一応手許にある文献から記録を拾って見た。尤も個人所有の文献からの収録であるから多くの重要な文献を脱落していることだと思われる。御教示御指摘を頂ければ幸いである。

#### ミヤマオオハナムグリの文献にあらわれた記録

北海道（松村松年、動物学雑誌、第6巻第65号：90, 1894）、Yezo (Lewis, Ann, Mag. nat. Hist. 5 (IV): 463, 1879., Cat. Col. Jap. Arch. London, P. 14, No. 1021, 1887)、石狩国（新島善直・木下榮次郎、北大演習林研究報告、II, 2, p. 168-169, 1923）、層雲峡・夕張・定山溪（八幡英夫、昆虫 15巻、2号: 83-84, 1941）、札幌（平山修次郎、原色甲虫図鑑、pl. 25, f. 4, p. 62, 1940）、白川、江差牛山（保田信紀、上川町の自然、p. 131, 1985）〔筆者所有標本の産地を参考までに加えておく。以下同じ。旭川、1♀、25-VII-1930、夕張、1♀、24-VI-1930、手稲、1♀、20-VII-1979、札幌、1♀、28-VII-1975、野幌、1♀、5-VII-1979、アポイ岳、日高、1♂、27-VII-1969〕。



ミヤマオホハムシの分布記録地集

新潟県 Echigo: Kurokawa (中根 猛彦・馬場金太郎、市立長岡科学博物館々報、p.9, 1960)、湯  
沢町八木沢 (山屋茂人、長岡市立科学博物館研究報告 No.19:24, 1984)、飯豊山塊、胎内溪谷  
(馬場金太郎、飯豊山塊、胎内溪谷の生物：195-240, 1972)。

山形県 飯豊連峯丸森 (白畑孝太郎・黒沢良彦、飯豊連峯：205, 1970)。

秋田県 [Akinomiya Ogachi, 1♂, 20-VI-1981, Yuze Kazuno, 1♀, VII -1986]。

栃木県 [湯本、日光、1♀, 2-VII-1960] .

茨城県 [日置正義、るりぼし 1号: 3, 1973] .

福島県湯ノ花 (前田光弘・藤田 宏、月刊むしNo.15:20, 1972).

群馬県片品村建設平 (前田光弘・藤田 宏、I.C., No.15:20, 1972. 須田 享、群馬県動物誌、p.337, 1985), 武尊山 (須田 享、1985) .

山梨県日野春 (市川敏之、月刊むし No.12, p.33, 1972).

長野県岩魚留 (八幡英夫、I.C., p.84, 1941).

静岡県静岡市二軒小屋、富士宮市西白塚 (奥田宜生、静岡の甲虫 Vol.5, No.12:6, 1987).

京都府芦生演習林 (水野弘造、月刊むし、No.73:29, 1977).

奈良県野迫川村大股 (山本雅則、Sakaiensis Vol.16, No.2:142, 1979).

和歌山県日高郡竜神村 (後藤 伸、紀州昆虫、Vol.2, No.3:49, Vol.2, No.5:121, 1950)。高野山 (伊賀正汎著、原色日本昆虫図鑑、甲虫編、pl.32, f.703, p.102, 1955).

鳥取県伯耆大山 (八幡英夫、I.C., p.84, 1941).

広島県臥竜山 (小阪敏和ほか、広島虫の会々報、No.16:188, 1977).

愛媛県面河 (宮武陸夫・小林 尚、宝塚昆虫館報、No.73:2, 1950)。面河溪 (石原 保ほか、四国昆虫学会々報 Vol.3, Supp. p.70, 1953. 矢野俊郎、松山昆虫同好会時報 16号: 18, 1961)、石手川上流米野々演習林 (石原 保ほか、愛媛大学農学部演習林報告 No.12:157, 1975).

福岡県障子岳・深倉峽 (松田勝毅、北九州の昆虫、Vol.10:12, 1963. 高倉康男、生物福岡 18号: 28, 1978.) 英彦山北部山頂付近 (牛島靖雄、月刊むしNo.43:38, 1974. 高倉康男 I.C., P.28, 1978). 白岩山 (北九州の昆虫、30巻 3号: 172, 1984).

ムラサキツヤハナムグリ *Protaetia cataphracta* Arrow, 1913

G. J. Arrow氏によりN. Japan: Nikko, L. Junsai, Fusai, Usui Pass. 産標本で新種記載をされた (Ann. Mag. Nat. Hist., (8) IX, pp.405, 407, 1913) (その後1974年M. E. Bacchus 氏により次の様にタイプ指定が記録された。Lectotype ♂, Japan: Kurigahara, Usui Pass, in flowers, 5-VII-1881 (G. Lewis). Paralectotypes. Japan: 3♀, Junsai Lake (G. Lewis); 2♀, Kashiwagi, 15-24-VI. 1881 (G. Lewis); 1♀, Nikko (G. Lewis), 1♀, "Japan" - Bull. Brit. Mus. Entomol. Lond., Vol. 32, No. 2:28).

1921年のS. Schenkling氏によるW. Junk Coleop. Cat Pars. 72 の中では本種はPotosia (*Caloptosia*) *aerata* Erichson の異常型に扱われている。



1923年の新島善直・木下栄次郎博士による“こがねむしに関する研究報告(第二)”の中で*Liocol-  
or brevitarsis*なる学名で(シラホシハナムグリの和名)のべられたものは*cataphracta* と*orientalis*  
を含んだもので図示された交尾器の図は*cataphracta* である(Taf. VII, fig. 14)。

即ち真の*cataphracta* がわからないので取りあげられず同時に*brevitarsis* も混同して取扱ってお  
られたことになる。従って新島博士が担当解説された日本昆虫図鑑の*brevitarsis* も*cataphracta*, *or-  
ientalis*と混同されている。このことは戦前の知見では*cataphracta* の正体が今一つしっかり把握さ  
れていなかった様に思われる。図説も加藤正世博士がナガシラホシハナムグリ(仮称) *Liocola* sp.  
(東京世田谷で採集)とされたのがある位である(1933)。

同博士の1935年の“主要金亀子科の分類(4)”にも出てこないし1939年の三輪勇二郎・中篠道夫両  
博士の“日本産鞘翅目分類目録Pars. 5. 金亀子虫科”にも出てこない。

1941年八幡英夫氏が“日本産*Protaetia* 属の種に就いて( I )”の中で始めて詳しく解説され新し  
くムラサキツヤハナムグリなる和名を与えられて産地も岩手(森岡), 山形(新庄、米沢), 東京  
(九段、玉川), 長野(洗馬), 大阪(箕面、妙見、久安寺川), 鳥取(大山), 札幌(円山公園),  
高松と多くを示され四国、北海道からは新記録とされた。

ただ氏は体型は*orientalis*に酷似するとされたのはいささか違う表現であり後黒沢博士が述べられ  
た様に(1959)体型は*insperata* にやや似ている。

戦後になって1955年には伊賀正汎氏による原色図説があらわれた。図示されたものは大阪府能勢産  
(VIII-1942)である。分布に北海道、本州、四国とされている。そして前にも一寸書いた様に黒沢博  
士は本種は*insperata* に比し低地性の種といえる。そして*insperata* と*lugubrisa* の交尾器とも特に  
相違がみとめられない。*orientalis*に似ると云うのではなく*insperata* によく似た種であるとされた  
(1959)。

1960年の野村 鎮氏の“日本産コガネムシ目録”の中には収録されている。分布は北海道、本州、  
佐渡、四国、九州となっている(佐渡の分布は中根・馬場両博士の記録によるものと考えられる、19  
60)。

1963年には“原色昆虫大図鑑 第2巻(甲虫編)”にて図説された(pl. 68, f. 6, p. 135)。分布は北  
海道、本州、四国、九州で1960年の佐渡島は省かれている(中根、馬場両博士の記録は学名の扱いも  
若干奇異に思われるし詳しいデータも無い。佐渡の記録は之だけであるから今一つはっきりするま  
で保留しておく方が良いのかもしれない)。

Medvedev, S. N. のFauna U. S. S. R. Scarabaeidae Vol. X, No. 5 には日本特産と云うこともあっ  
てか収録されていない。

その後日本で本種を図説されたものは次の様にある。本種は日本特産種で余り普通に見られないこ

ともあってか学名に就いての混同はほとんどなかったようである。ただ正体ははっきりしなかったことから記録が戦前では数える程しか現れていない。

図説。1975, 林 長閑, 学研中高生図鑑 2 昆虫Ⅱ [甲虫] (p.76,405)。1984,, 黒沢良彦・渡辺泰明、野外ハンドブック。12. 甲虫 (山と溪谷社) (p.187)。1985, 林 長閑編 決定版生物大図鑑 昆虫Ⅱ甲虫(p.94 ~95)。1985, 黒沢良彦 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)(pl.74, f.15, p.411)(此処で分布に屋久島が加わっている。)

一応今迄の文献上に現れた本種を府県別にまとめて見ることにする。手許にあるものみの収録であるから重要な文献で脱落しているものが数多くあるのではないかと気がかかる。御教示頂ければ幸いである。

これで御覧のごとく本種の方は日本には広く分布している様であるが、ただごく普通に見られる種ではなく、やや少ない種に属する様である。一般に注意が拂はれていない点も影響しているとも思われる。残念なことに生活史に関しては全くわかっていないのが現状である。こちらも早く解明しなければ絶滅になる恐れがある(最近庄田達巳氏は横浜市緑区荏田でオサムシ類の冬期採集の際、土中より3、4日に3♂4♀の本種を採集していると、個体はすべて新鮮であったとの大変貴重な報告をしておられる、1985)。

日本特産のハナムグリのようであるから何時迄も生きつづけてほしいものである。

#### ムラサキツヤハナムグリの文献にあらわれた記録

北海道尊菜沼(Arrow, Ann, Mag, Nat, Hist. (8) IX:405, 1913. Bacchus, Bull. Brit, Mus. Entomol. Lond., Vol.32, No.2:28, 1974). 越路・上川町(保田信紀, 上川町の自然:131, 1985). 札幌(円山公園)(八幡英夫, 昆虫 Vol.15, No.2:83, 1941)[旭川, 1♀, 25-VII -1937]。

秋田県山本郡峰村 [1♀, 20-VII-1986, F.Sato ;leg.]。

岩手県盛岡(八幡英夫, I.C., p83, 1941)。



ムラサキツヤハナムグリの国内記録地矣

山形県新庄・米沢(八幡英夫, I.C., p83, 1941), 朝日岳鉱泉(板垣輝彦, 新昆虫 9巻5号: 12-15, 1956), 朝日岳(朝日鉱泉), 吾妻山(滑川)(板垣輝彦, 山形昆虫同好会々誌 2巻1号: 6, 1964), 烏海山方草滝(櫻井俊一, 昆虫と自然 16巻14号: 12, 1981)。

新潟県佐渡島: Umezu, Otowa-ike (中根猛彦・馬場金太郎, 市立長岡科学博物館々報 No.4:9, 1960).

この記録は *insperata* の亜種 *cataphracta* となっている。この様な表現を使用されているのはこの記録だけのようである)。湯沢町八木沢(山尾茂人, 長岡市立科学博物館研究報告 19号:24,1984)。

茨城県(日置正義, るりぼし No.1:3,1973)。

栃木県, Nikko(Arrow, I.C., p.405,1913. Bacchus, I.C., p.28,1974)。

東京都世田谷(加藤正世, 分類原色日本昆虫図鑑, 第八輯, pl.16, f.12, *Liocola* sp.となっているが図から本種と判定出来る), 九段, 玉川(八幡英夫 I.C., p.83,1941), 城山(北川太一, 昆虫界 9巻, 91号:655,1941), 高尾山(市川敏之, 月刊むし 9:31,1971)。御蔵島(澤田玄正・渡辺泰明, 農学集報 14巻 1号:25,1969。平沢伴明, 月刊むし No.152:37,1983。石田正明, 東京経済大学自然科学論集 63号:149,1983。I.C., 68号:1984)。

群馬県栗ヶ原, 碓氷峠(Arrow, I.C., p.405,1913. Bacchus, I.C., p.28,1974)。片品村建設平(須田享, 群馬県動物誌:337,1985)。

神奈川県逗子市神武寺, 葉山町長柄, 横須賀市田浦町(大場信義ほか, Sci, Rep. Yokosuka City Mus. 28:49,1981)。横浜市緑区荏田(庄田達巳, LAMELLICORNIA, No.1:54,1985)。

埼玉県芦ヶ久保(市川敏之, 月刊むし 9号:31,1971)。

山梨県日野春穴山方面(市川敏之, 月刊むし 12号:32-33,1972)。

長野県洗馬(八幡英夫, I.C., p.83,1941)。

富山県高岡市[ 1♂, 22-VI-1946, Ishida leg.]

福井県大野市刈込池・小池(佐々治寛之・斎藤昌弘, 福井県昆虫目録:122,1985)。

京都府北桑田郡美山町芦生(水野弘造, 月刊むし73号:29,1977。春沢圭太郎 LAMELLICORNIA No.1:31-35,1985)。岩倉(谷 寿一 Microcosm Vol. VI:8,1979)。

大阪府箕面山(八幡英夫, I.C., p.83,1941。後藤光男, 箕面山の動物相調査:176,1965。同改定版:143,1967)。妙見・久安寺川(八幡英夫, I.C., p.83,1941)。能勢(伊賀正汎, I.C., pl.32, f.704, p.102,1955)。

箕面市止々呂美, 西之所, 東能勢村吉川峠, 吉川下, 初谷, 青具山附近, 高代寺道(仲田元亮, 能勢の昆虫(甲虫), 1970,1978,1982,自刊)。箕面市西ノ所, 豊能町初谷, 余野[ 中田隆昭, Crude No.30:16,1987)。

奈良県柏木(Kashiwagi)(Arrow, I.C., p.405, 1913. Bacchus, I.C., p.28,1974)。野迫川村伯母子岳[山本雅則, Sakaiensis 16巻 2号:142,1979)。

兵庫県川辺郡東谷村妙見山西方(今西芳之, 関西昆虫雑誌 Vol.5:24,1938)。猪名川町木間生, 内馬場, 上阿古谷, 川西市一庫~猪名川町民田, 横地, 笹部, 若宮(中田元亮, I.C., 1978,1982)。笹部[ 1♂, 28-VII-1959, T. Takahashi leg.]。神戸市六甲山[ 1♀, 16-VII-1938, T. Takahashi leg.]。

宍粟郡音水[ 2 ♀, 20-VII-1969, T. Takahashi leg. ]。出石郡出石町内田[ 高橋 匡, VITA No.1, 1964. IRATSUME No.5, 1981]。美方郡湯村[ 1 ♀, 27-VII-1952, T. Takahashi leg. ]。

鳥取県伯耆大山(八幡英夫, I.C., p.83, 1941)。

岡山県真庭郡八束村上長田字田(桂 孝次郎他, 蒜山の生物調査報告: 158, 1973), 県北部(倉敷昆虫同好会, 岡山県の昆虫, p.129, 1978)。

広島県帝釈峡, 十方山(小阪敏和ほか, 広島虫の会々報 No.16:188, 1977), 神石郡高蓋, 高光(秋山美文, 広島虫の会々報 No.25:51, 1986)。

香川県高松(八幡英夫, I.C., p.83, 1941. 矢野俊郎, 松山昆虫同好会時報 No.16:18, 1961)。

愛媛県面河溪(石原 保ほか, 四国昆虫学会々報告 Vol.3, Suppl.p.70, 1953. 矢野俊郎, I.C., p.18, 1961)。

徳島県那賀郡沢谷村上沼谷, 麻植郡木屋根平村川井峠(三宅義一ほか, 昆虫科学 No.7:31, 1958. 矢野俊郎, I.C., p.18, 1961)。

福岡県祖母山嶽(三宅義一, 北九州の昆虫 Vol.4, No.1:27-28, 1957), 英彦山(神谷寛之, 彦山昆虫目録Ⅱ, 鞘翅目: 25, 1959. 高倉康男, 生物福岡 No.1:7-11, 1961. I.C., No.18:28, 1978). 障子岳・深倉峽(高倉康男, I.C., p.28, 1978)。白岩山・本屋敷・国見峠(山脇好之, 北九州の昆虫, Vol.30, No.3:172, 1984)。

熊本県阿蘇郡南小国村市原(平野幸彦, 新昆虫, Vol.9, No.12:48, 1956. 大塚 勲, 北九州の昆虫 Vol.9, No.2:18, 1962)。熊本市立田山, 球磨郡水上村(大塚 勲, I.C., p.28, 1962)。

鹿児島県屋久島(中根猛彦, 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書: 609, 1982)。

(JULY • 1987)

# 宝塚市安倉上池のトンボ

新家 勝

## I はじめに

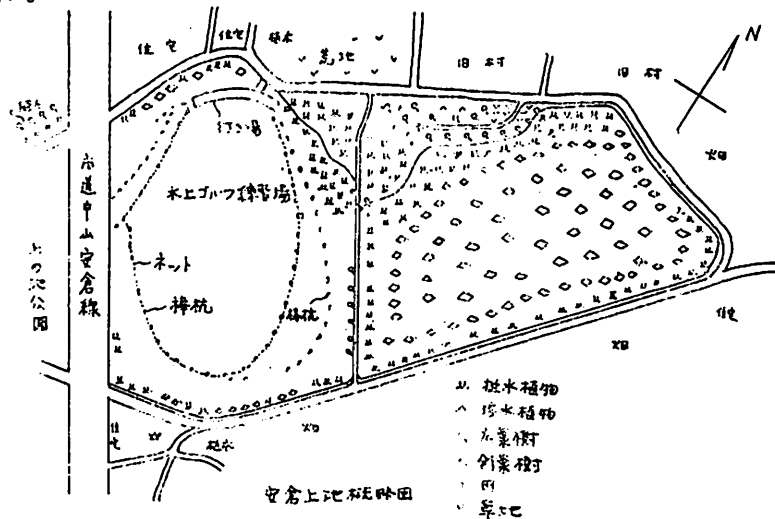
宝塚市安倉上池は、阪急電鉄中山駅の南方約2 km、安倉北四丁目にある大きな池である。市街地に接しているながらも、豊かな自然環境に恵まれ、多くのトンボがみられる。1984年には多くのウチワヤンマやアオヤンマを、1985年にはオオヤマトンボを見ることができたので、この池のトンボのスライド作りを思い立った。スライドは未完成であるが、1986年に観察したトンボについて報告させていただく。

## II 観察結果

### 1 環境

池は、市街地と農業地域が接する所にあり、北側に一部が新興住宅と接し、一部は森や草地を介して旧村と接している。南側から東側にかけては、堤防を境に田、畑、植木畑などと接しており、こちら側は昔からの自然環境が、ほぼそのまま残されている。西側は、幅員15mの市道中山安倉線を境として、大部分が上の池公園、極く一部が田や植木畑と接している。

池は、周囲約14,000m(市域図から推定)、東西に長く、ほぼ中央を南北に走る通路で二分されており、それぞれ池に降った雨水のほかポンプ場で汲み上げた地下水を溜めている。近くを流れる天王寺川とも水路でつながっているが、川の増水時に水門をあけたときだけ川水が流れ込む。なお、住宅からの下水や田畑からの落し水の流入はないので、生活廃水や農薬の流入による汚染は、まず考えられない。



池の岸は、西岸が鋼鉄製型材の打込みによる護岸になっているほか、北岸の愛宕山神社の森の部分を除き、すべてコンクリート護岸になっている。ただし、南岸は上面の道路とコンクリート護岸との間に地肌の部分があり、雑草が生えている。

護岸の内側は、東岸側の一部及び西岸側の大部分は何も生えていないが、その他の部分には、大木、ヨシ、ガマ、マコモなど背の高い挺水植物が生えている。これらが途切れたところには、ガガブタ、ヒシなどの浮水植物や、一部にはイの仲間など背の低い挺水植物が生えている。東側の池、西側の池とも北岸側にヨシ、ガマ、マコモの単純又は混生の群落があり、東側の池では愛宕山神社の森と接している。また、東側の池は、夏期に浮水植物であるヒシが繁茂し、それらに混って所々に奇怪なオニバスが生える。西側の池は、水上ゴルフ練習場として利用されているため、ゴルフボール回収の妨げとなるヒシは駆除されており、殆んど見当たらない。

東側の池の北側の一部は、池面から5m程高く、台地になっており、赤い鳥居と古びた祠が一つだけの小さな神社が建っている。これが、愛宕山神社で、東西に延びる参道の両側と神社の西側は、植生の豊かな森になっている。一部伐採されているが、クロマツ、クス、ヤブセニッケイ、クロガネモチ、ナナミノキ、アラガシ、アベマキ、アオギソ、センダン、アカメガシワ、サクラなどの高木が生え、その裾には、ヤブツバキ、シャシャンボ、モチツツジ、ナワシログミ、トベラなどの低木やネザサがはえている。また、蔓性植物であるアケビやサネカズラが、所々でこれらの木々からみついている。森の東側の北面は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヒメジョオン、ヨモギ、クズなどが繁茂する小さな草地になっている。

その他、西側の池にはゴルフ練習場の足場やネットを張るための棒杭が多数あり、東側の池には倒木がはまっている。

## 2. 観察したトンボ

### (1) Agrionidae イトトンボ科

#### a. *Ischnura asiatica* Brauer アジアイトトンボ

VII. 25. 1986に目撃、VIII. 2.♂1986に1♂採集。

いずれも南岸の護岸と道路との間の草むらにいたもので、この池では余り見られない。

#### b. *Cercion calamorum* Ris クロイトトンボ

V. 31.1986, VI.15.1986, VI. 21.1986, VII.6.1986, VII.13.1986, VIII.16.1986, IX.21.1986に目撃。

5月から9月にかけてヒシやガガブタの葉上で普通に見られる。未熟虫は愛宕山神社の森の林縁でよく見られる。

#### c. *Cercion hieroglyphicum* Brauer セスジイトトンボ

V. 1.1986, VI.15.1986, VI.21.1986, VI.22.1986, VII.19.1986, VII.25.1986, VIII.14.1987, VIII.

16.1986, VIII.23.1986, IX.6.1.1986, IX.7.1986, IX.21.1986に目撃。

この池では最も多いイトトンボで、ヒシ、カガブタの葉上や周囲の草むらヨシなどの葉上でよく見られる。未熟虫は前種同様、愛宕山神社の森の林縁でよく見られる。

(2) *Platycnemididae* モノサシトンボ科

a. *Copera annulata* Selys モノサシトンボ

VI.15.1985, VI.16.1985, V.31.1986, VI.15.1986, VI.21.1986, VI.22.1986, VII.6.1986, VII.19.1986, VII.25.1986, VIII.11.1986, VIII.23.1986, IX.7.1986に目撃。

水際に草やヨシ、マコモなどの葉上によくいるが、ヒシなど浮水植物の葉上にいることはない。未熟虫は愛宕山神社の森の日陰に多い。

(3) *Gomphidae* サナエトンボ科

a. *Ictinus clavatus* Fabricius ウチワヤンマ

本誌第13巻第2号で報告済。1985年から1986年についても6月下旬から8月中旬にかけて、棒杭、倒木の枝、水辺に突き出た立木の枝、ヨシの枯穂などの先によくとまっていた。

(4) *Aeschnidae* ヤンマ科

a. *Aeschnophlebia longistigma* Selys アオヤンマ

本誌第13巻第2号で報告済。1985年から1986年についても6月中旬から7月下旬にかけて、ヨシ、マコモの間をよく飛んでいた。

b. *Anax parthenope julius* Brauer ギンヤンマ

VII.14.1985, VII.19.1986, VIII.2.1986, VIII.14.1986, VIII.23.1986, IX.6.1986, IX.7.1986, IX.14.1986に目撃。VI.22.1986羽化殻1体を採集。

最もありふれたヤンマであるが、この池ではアオヤンマより少ない。池の片隅を時々、徘徊しているが、しばらくするといなくなってしまう。羽化殻の採集例からみて、発生していることは確実である。

(5) *Cordulegasteridae* オニヤンマ科

a. *Anotogaster sieboldii* Selys オニヤンマ

IX.6.1986, IX.14.1986に目撃。いずれも池を通過しただけであった。

(6) *Corduriidae* エゾトンボ科

a. *Somatochlora viridiaenea atrovirens* Selys オオエゾトンボ

VIII.30.1986に池の西側を通る市道中山安倉線沿いで1♂を目撃し、確認のため捕獲した。ここは植木畑に面した小さな田であり、本種がよく見られる山間部の湿地とよく似ている。移動中に立ち寄り、しばらく滞在していたのであろう。



(7) *Macromiidae* ヤマトンボ科

a. *Ephthalma elegans* Brauer オオヤマトンボ

VI.15.1985目撃、VI.16.1985排水口に近い浅瀬で産卵する1♀を目撃、VI.22.1985棒杭に付着した羽化殻を目撃・撮影、VI.30.1985目撃、VII.14.19851♂を採集、VII.20.1985目撃、VI.7.1986棒杭に付着した羽化殻を目撃、VI.8.1986目撃、VI.15.1986交尾を目撃、VI.21.1986ポンプ場近くの浅瀬で産卵する1♀を目撃、VI.22.1986キショウブに付着した羽化殻を採集、VII.6.1986棒杭に付着した多数の羽化殻を目撃、VII.19.1986、VII.20.1986、VII.25.1986、VIII.2.1986、VIII.11.1986、VIII.14.1986、VIII.16.1986、VIII.30.1986目撃、IX.6.1986曇天時ヨシの軸にぶらさがるように静止している1♂を目撃・撮影、IX.7.1986、IX.14.1986に目撃。

上記中、単に「目撃」とあるのは、いずれも♂のパトロールで、6月上旬から9月中旬までの間、晴天で風がなければかならずみられた。最も個体数が多いのは6月中旬から7月中旬で、右回りのものと左回りのものが、度々、鉢合わせする。

(8) *Libellulidae* トンボ科

a. *Orthetrum albistylum speciosum* Uhler シオカラトンボ

V.17.1986、VI.22.1986、VII.12.1986、VII.13.1986、VII.19.1986、VII.20.1986、VII.25.1986、VIII.2.1986、VIII.14.1986、VIII.16.1986、VIII.23.1986、VIII.30.1986、IX.14.1986に目撃。

5月中旬から9月中旬にかけて普通に見られる。

b. *Deielia phaon* Selys コフキトンボ

VII.7.1984採集、VI.23.1984、VI.30.1984、VI.16.1985、VI.30.1985、VI.15.1986、VI.21.1986、VI.22.1986、VII.6.1986、VII.12.1986、VII.13.1986、VII.19.1986、VII.20.1986、VII.25.1986、VIII.2.1986、VIII.11.1986、VIII.14.1986、VIII.16.1986、IX.6.1986に目撃。

池から移動する様子はなく、6月中旬から9月上旬にかけて殆んどいつでも見られる。ただし、8月下旬以降は個体数が減るので見られないこともある。大体は水際にいるが、VI.22.1986に目撃したものは高さ約3mのヤナギの枝先に静止していた。

c. *Crocthemis servilia* Drury ショウジョウトンボ

VIII.14.1986、VIII.16.1986、IX.6.1986に目撃。

d. *Sympetrum dawinianum* Selys ナツアカネ

X.3.1986、X.10.1986に目撃。

e. *Pseudothemis zonata* Burmeister コシアキトンボ

VI.30.1985、V.31.1986、VI.15.1986、VI.21.1986、VI.22.1986、VII.6.1986、VII.12.1986、VII.13.1986、VII.20.1986、VII.25.1986、VIII.2.1986、VIII.11.1986に目撃。

6月中旬から8月中旬にかけて、いつでも見られる。ただし、6月頃は愛宕山神社の森に  
ることが多い。

f. *Rhyothemis fuliginosa* Selys チョウトンボ

VI.23.1984, VI.30.1984, VI.15.1986, VI.21.1986, VII.6.1986, VII.19.1986, VII.25.1986, VIII.  
2.1986, VIII.14.1986, VIII.16.1986, VIII.23.1986, IX.6.1986 に目撃。

6月中旬から9月初旬にかけていつでも見られる。6月頃は愛宕山神社の森の東側にある草  
地によく静止している。8月の中旬、♂がヨシなどの穂先にとまって♀を待っている。♀が現  
れると、追いかけて交尾する。しばらく交尾したまま飛び、離れると♀はヒシの間の水面に産  
卵し、♂は前と同じように次の♀を待つ。

g. *Pantala flavescens* Fabricius ウ斯巴キトンボ

7月初旬から、草地や付近の路上を飛んでいる。目撃日の記録がないのは、カメラで追うこ  
とがむずかしいためだろうか。

### III まとめ

宝塚市の安倉から中山付近、山本、それに伊丹市にかけて、大きな野池が多い。安倉上池を始め安  
倉中池、安倉下池、西野池、谷池、菰池、真池、辻ヶ池、皿池、八幡池、淵池、菱池、新池、それに  
伊丹市の荒牧池、黒池、西池、カモで有名な昆陽池や瑞ヶ池など数えればきりが無い。そして、どの  
池でもトンボの姿は見られるが、安倉上池ほど多種のトンボがみられる池はない。

理由はいろいろ考えられるが、第一には生活廃水や農薬による汚染がないことであろう。しかしな  
がら、かならずしも水がきれいなわけではない。ヒシが立枯れる10月、水の色は薄黒く変色し、すざ  
ましい腐敗臭が池面に漂う。このようなことは、ヒシが繁茂する池に共通しているが、一過性のもの  
であり、幼虫の死活に大きな影響はないようである。

次に、変な表現であるが、池が十分に整備されていないことであろう。最近、多くの池で、護岸の  
コンクリート化などの整備工事が進められており、底までコンクリート化されることはないにしても、  
堆積した土や泥とともにヨシ、マコモなどの植物さえ除去されてしまう。ご多聞に漏れず、安倉上池  
の護岸もすでにコンクリート化又は鋼鉄化されているが、その後かなりの年月の間、手入れされてい  
ないので、工事の際に損われた植生が回復しており、元々手がつけられなかった部分と相まじって豊  
かな植生をなしている。また、手入れが行き届いていないため、一部には土砂が堆積して、不要な  
棒杭や倒木も放置されている。そして、これらの複雑な環境を利用して、多くトンボが住み分け、羽  
化の足場や産卵の場所としている。棒杭や倒木の先、穂が枯れ落ちたヨシの先には、ウチワヤマガ  
が陣取る。ヨシやマコモの群落を縫うようにアオヤンマが飛ぶ。水際のヨシやマコモの穂先や背の高い葉  
先には、チョウトンボが羽根を休め、比較的低いところでは、コフキトンボ、コシアキトンボ、ショ

ウジョウトンボ、モノサシトンボが獲物を待つ。また、ヒシヤガガブタの葉上には、セスジイトンボやクロイトンボ、が縄張りを作る。

また、池の北側の森や草地が、未熟虫の時期を過ごす絶好の場所になっている。セスジイトンボ、クロイトンボ、モノサシトンボ、コシアキトンボの多くは、未熟虫の時期に過し、やがて林上を飛ぶ。しかし、殺し屋シオヤアブも結構多い。

更にまた、池が大きいと、大きな池を好むオオヤマトンボが住み付く。

以上、紹介したトンボはすべて普通種であり、生態もありふれたものだが、年月日のデータと環境についての記載がかなり詳しいので、例えば10年後に同様の観察をして比較して見れば、環境とファウナの推移がよくわかるのではないかと思う。

なお、最後になりましたが、トンボの同定と生態について、いろいろとご教示いただきました関西トンボ談話会の井上 清氏に厚く御礼申し上げます。

#### IV 参考文献

1. 宝塚のトンぼ 宝塚市教育委員会、1982
2. 近畿のトンボ 関西トンボ談話会、1984
3. 原色昆虫大図鑑Ⅲ 北隆館
4. 市域図 宝塚市

## カトリヤンマの産卵観察例

田 中 稔

カトリヤンマ *Gynacantha japonica* BARTENEF は、西宮市では最も普通のヤンマであるが、私は、今回初めて産卵を観察したのでその報告をする。

1986年9月7日の夕方5時半頃に、西宮市上ヶ原山田町の湿地の中のB湿地（本誌第14巻第1号、西宮市上ヶ原山田町のトンボ）を、犬と散歩がてらトンボの観察巡回中に足元より5～6匹のカトリヤンマが一斉にバサバサと飛び立ち地上1m位にホバーリングをした。5分程待ったがホバーリングを続けているため、10分程その場をはなれて戻ってみるとやはり産卵をしていた。湿地の水は完全に

なくなっており、わずかに湿った泥に静止した♀が羽をこきざみにふるわせながら尾端をあちこち探って5分程産卵をした。少し(10cm)歩いて産卵。又少し移動して産卵をくりかえしていた。当日の日は18:17であった。

## ウスバシロチョウの採集

堀 紳 二

1985年から86年にかけて、兵庫県播磨地方各地(瀬戸内海側)で、ウスバシロチョウを採集した。採集地が100ヶ所になったので報告する。産地ごとの変異等はまだ詳しく調べていないが、大きさや斑紋に微妙な違いがあるように思われる。雌に関しては、佐用川上流(千種川水系)で黒い個体の多い産地があった。夢前川水系の産地の雌もかなり黒化していた。逆に白い雌が多かったのは揖保川上流域であった。また市川水系の産地では黄色い雌が見られた。大きさに関しては、山崎町野々住原の高原で普通の高さの個体に混じって小さな個体がかかなり飛んでいたのは興味が深かった。

### <採集地>

大河内町(市川水系)	川上、上小田
生野町(〃)	栃原
夢前町(夢前川水系)	小畑、寺河内、馬頭、坂根、我孫子、佐中、熊部、河原口
安富町(揖保川水系)	栃原、大河川上流、関
新宮町(〃)	麦子口、福原、田幸
〃(千種川水系)	下筋原、上筋原、二柏野
山崎町(揖保川水系)	上ノ上、野々住原、宮の元
〃(千種川水系)	土万、八重谷峠、大沢、小茅野
一宮町(揖保川水系)	河内福田、奥福地、福地白口、草木、下千町、阿舍利、溝谷、西公文和田、小原、志倉、靴屋、富士野、黒原奥組、深河谷、池垣内
波賀町(〃)	斉木前地、下水谷、日ノ原、赤西、音水、引原、平桑、石亀、戸倉、堀、道谷、若杉峠

- 千種町（千種川水系） 黒土、岩野辺、内海、荒尾、宝の木、奥西山、川井、西河内口、天児屋、  
西河内中野、戸井の元、河内中村、三室高原口
- 上月町（ ” ） 西大島、桜山、樺坂
- 三日月町（ ” ） 三原、弦谷、春哉、金山、小原、湯浅、中村、鎌倉、三日月
- 南光町（ ” ） 西下野、青木、下三河、門前、名目津輪
- 佐用町（ ” ） 淀、亀ヶ途、末包本村、末包小中山、大島王子、中山、海内上土居、高野、  
海内葦畑、水根羽蔵、鴨尾、若州、奥海下村、奥海桑村、奥海奥土居
- 他に目撃のみの産地多数。

参考文献

- 山本広一（1978）兵庫県のウスバシロチョウ 昆虫と自然Vol.13 No.7
- 唐士洋一（1979）西播におけるウスバシロチョウについて てんとうむしNo.5

## 西宮市でウスイロコノマチョウを採集

田 中 稔

ウスイロコノマチョウ *Melanitis leda* LINNAEUS を、西宮市六軒町で採集、飼育しているので報告する。

1986年9月14日の夕方、犬と散歩中にバス停新甲陽口前の駐車場の草むらより、大型のヒカゲチョウがフワフワと飛び出した。クロコノマチョウと思い、家に走って帰りネットで採集した、裏面の眼状紋のはっきりした、ウスイロコノマチョウの♀であった。手で採ろうと追いかけていた時に、ジュズダマに産卵するような動作をしたので、飼育箱にジュズダマを鉢植にしてバナナと共に入れて飼育してみた。

9月15日、11卵を産卵

9月21日、11卵がフ化

10月11日、ジュズダマの水上げが悪いため、1匹のみ残っていた。緑色で23mm位、巣をつくる。

10月30日、蛹化

11月29日、羽化失敗、裏面は褐色の濃い枯葉状の秋型

合せて、クロノマチョウ *Melanitis phedima* CRAMER の記録を報告する。

1 ♀, 神戸市住吉川上流寒天山, 2. IX. 1955, 田中稔採集

1 ♀, 神戸市住吉川上流寒天山, 10. X. 1959, 田中稔採集

(〒 662 西宮市六軒町 8-7)

## オオムラサキ 絶産 になるか

東 正 雄

オオムラサキ *Sasakia charonda* HEWITSON は1957年国蝶に指定されている。北海道・本州・四国・九州に分布と記録があるが京阪神や近畿の分布について考察する。

昭和20年頃までは大阪箕面山、勝尾寺、能勢電鉄の笹部～吉川間の溪流、能勢妙見山へのケーブル乗場付近。神戸市北区大池や山の街付近、有馬温泉の鼓滝付近でも6月下旬～7月上旬姿をみた。クヌギの巨樹の樹液に吸蜜しているときには比較的採集しやすいが失敗しても梢上を占有する蝶だから、しばらくすればもとの場へ戻るので成功することもある。戦後クヌギの大きな樹木が伐採されたので最近著しく採集が困難である。川西市や猪名川町上流地域に生息していたところが食草のエノキが少なくなりクヌギが伐採されたり、宅地造成や道路改修の為に生息環境が著しく悪くなったのが阪神間で以前に採集できた場へ行っても全く見られなくなった。伊吹山麓の大平寺へのよい採集地は既に絶滅している。遠くでは鳥取県大山の山麓も以前は高度 800～850m地帯をとんでいる勇姿をたびたび目撃したが最近全くみられない。若狭の青葉山も麓の松尾寺付近は昭和10年頃かなり多くみられたが近年皆無である。台湾へ旅行したとき台湾山脈北部から中部でやや高地に分布するが著しく稀である由。なかなか採集でき難いらしい。特に♀は更に稀でやがて絶産となるだろう。台湾産は亜種で (s-sp. *formosana* SHIROZU)。中国・朝鮮亜種 (ssp. *coreana* LEACH) もある。タイプの産地は関東地方(横浜近郊?)と推察される。全国の自然保護協会の会員諸氏や日本昆虫学会、鱗翅類学会の会員たちが協力して保護するよう自然の環境を悪化しないように国蝶として指定していながら絶滅近くなったら国の宝がなくなることになり国民の子孫に対して大変残念なことになる。識者によって愛護し永遠に保護するべきである。

(1987年8月受領)

## ヒロオビミドリシジミ の 保護

東 正 雄

1974年（昭和49年）7月27日付朝日新聞の記事によると“ナラガシワの群落無残”大阪能勢の三草山と題して珍蝶ヒロオビミドリシジミの採卵の為に三草山標高564mにはナラガシワの大群落があるが能勢の自然と文化を守る会（代表田和好さん）の調査では高さ約20m、幹の直径20～30cmのナラガシワの成木数百本の群落のうち約50本が高さ50cm～1m付近でのこぎりで切り倒されていた。「人の山を荒らして、それでも昆虫を愛するといえるのでしょうか」と地元の人々は怒っている。この記事を読んで筆者は蝶類研究・採集家は大いに反省すべきで大変な悪徳行為であると思っていた。

本年1976年（昭和51年）6月20日、K学院の採集指導のため現地へ出向した。丁度成虫の発生期であったらしい30人内外の採集家（学生や社会人で趣味の人らしい）かなり遠方（関東方面）の人達が成虫の飛び出す場所に集まっていた。立札が2ヶ所あった。「山の登山者たちはヒロオビミドリシジミ採卵の為にナラガシワを切り倒したりしたら見つけ次第警察に届ける、そして処罰せられる」と怒りの警告である。

この蝶は近畿地方や中国地方の局部的に分布していて既に川西市笹部は絶産（？）そこで三草山は分布の東限である。成化の時期が6～7月上旬で落葉高木のナラガシワに産卵する特性がある。♂の翅表は青味ある緑色、裏はうす褐色で白いW型の条によって広い帯に見えるのでこの蝶に名がつけられた。愛蝶家は6～7m位の繕ぎ網で採集に早朝から午前中まで熱中する。2～3匹採集すればよいのに何回と出向して競争して多くの個体数を採集するようである。蝶類の採集家は目的の蝶だけで他の昆虫類などは全く無関心である。植生との関係など相関関係を考察することなどしないのは実に科学する心の為の採集でない。蝶マニアである。切手蒐集マニアに近いように思った。全国の代表的な蝶（珍・稀）ばかり集める結果となる。科学に貢献する為の採集であり、研究であってほしいと思いつつ帰途についた。

三草山の生態やナラガシワの群落がこの稀な蝶の生息に最もよい環境を与えている。この珍蝶を永久に保存するナラガシワの原生林がほしいと思う。

（1987年8月受領）

## 三木市のオオマルマメエンマムシの記録

沢田 和 宏

筆者は本誌第15巻第1号に、1986年9月に兵庫県で採集したエンマムシ類を報告したが、実は同時に採集したエンマムシに1種同定未了のため未報告のものがあつた。その後同じ種を本年3月にも三木市でまた採集した。

それらを調べたところ、兵庫県からは未記録と思われるオオマルマメエンマムシ *Gnathoncus nametensis* MARSEULであつたので分布記録として報告しておきたい。

10exs., 兵庫県三木市下石野, 27. IX. 1986; lex., 同所, 3. III. 1987

前者のうち9頭は養鶏場の鶏糞下より、1頭は牛糞下から採集したものであり、後者は同じ養鶏場の近くの畑の畦に捨てられていた野菜クズの下から見出したものである。

本種は鶏糞からは容易に発見出来るが、牛糞および野菜クズからの採集例は殆んど無いのではないかと思われる。

ついでであるが兵庫県からは2例しか採集記録のない同属のマルマメエンマムシ *G. nanus* (SCRIBA) も鶏糞から時々採集されるので、養鶏場を精査すれば県内の新たな生息地が確認出来ると思われる。

## 姫路市でセマルケシマグソコガネを採集

沢田 和 宏

「SAIKAKU 第4号」(1987)に本会の高橋寿郎氏が「兵庫・神戸を原産地とする鯉角類について」と題して、兵庫・神戸産標本に基づいて新種記載された鯉角類25種を報告されている。

その中にセマルケシマグソコガネ *Psammodyus convexus* WATERHOUSE が採り上げられており、それによれば兵庫県からの採集記録は多くないとのことである。

筆者は次の通り姫路市で採集しているので記録しておきたい。



3 exs., 姫路市の形海岸, 26. IX. 1986

本種は一般に採集しにくいコガネムシとされているが、実際には海浜や河川敷の砂地の植物根際を探すと普通と言っても良い位に各所で採集出来る。

本種の食性に関する詳しい報告を筆者は知らないが、筆者の採集経験および文献上のデータなどから推測すると腐敗植物質を好んで食しているようである。

兵庫県の新産地についてであるが、高橋氏も述べられている様に、瀬戸内側の海岸はコンクリートですっかり固められているので新たな産地の発見はなかなか困難と思われるが、日本海側の海岸、さらに大きな川の川源の砂地を調べれば本種は容易に見られることと思う。

なお、ついでであるが川西市の隣りの大阪府池田市桃園で、1986年5月26日にケンマグソコガネを2種採集しているので参考資料として記録しておく。

セマルケンマグソコガネ 2 exs.

ホソケンマグソコガネ *Trichiorhyssemus asperulus* (WATERHOUSE) 1 ex.

2種共、猪名川川岸の砂の中から採集したが、兵庫県側にも自然生息しているはずである。

## ヤマトアオドウガネの採集例

田 中 稔

ヤマトアオドウガネ *Anomala japonica* ARROWの、採集例を報告する。

1 exs., 西宮市鳴尾町上田, 26 VI 1962, 田中稔採集

1 exs., 津名郡東浦町浦, 13 VIII 1980, 田中稔採集

鳴尾町の個体は、夜勤作業中に工場内の明りに飛来したもの。東浦町の個体は妻の実家の室上で、ブラックライトに多くのアオドウガネと共に飛来したものである。

本種の同定は図鑑を見てもハッキリせず自信がなかったが、先日、中田隆昭氏が遊びに来られた時に、標本箱のアオドウガネの中より選別同定していただいた。本誌をお借りして、同氏にお礼を申し上げる。

# シロチビコブカミキリ 六甲山にて採集

( 兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 1 9 6 )

高 橋 寿 郎

シロチビコブカミキリ *Miccolamia (Isomiccolamia) tuberculata* (Pic) は Pic 氏により京都産標本で *Pogonocherus* 属で新種記載された種である (Melang. exot.-ent. 27:10, 1918).

1933年の松下眞幸博士の大著 "Beitrag zur Kenntnis der Cerambyciden der Japanischen Reichs" (Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 34(2):157-445) の中では (p. 382), *Pogonocherus (Pityphilus) tuberculatus* Pic は Honshu (Kyoto) を原産地に分布を中央日本とされている。

1940年水戸野武夫氏は "日本産鞘翅目分類目録, Pars. 8, 天牛科" において (p. 187) *Pogonocherus tuberculatus* Pic コバネチビカミキリ, Japan (Honshu) として記録された。

松下眞幸博士は上記水戸野氏のは *Miccolamia glabricura* Bates, 1884 であるとされた (昆虫界, Vol. 11, No. 110, p. 161, 1943).

1946年に発行された関 公一氏の "新日本産天牛科目録" では (p. 106-107), *Miccolamia* 属はクワクワカミキリ *M. cleroides* (和名は原文のまま以下同), ツマキクワクワカミキリ *M. glabricura* (*Pogonocherus tuberculatus* は本種のシノニムなりとある。これは松下博士によるものであろう), チビコブカミキリ *M. verrucosa* の3種が収録されている。

大林一夫氏は1963年 *glabricura* は *Miccolamia verrucosa* Bates の *morpha* としてこの種をタイプに亜属 *Isomiccolamia* を設定された (Frag. Coleop. Pars. 3, p. 12). 同年の大林一夫氏による "原色昆虫大図鑑 II, 甲虫篇" (北隆館) には *M. verrucosa* の図説はあるが (pl. 157, f. 18, p. 314) *M. tubercula* に就いては何等の言及もない。

1969年の小島圭三・林 匡夫両博士による "原色日本昆虫生態図鑑 I. カミキリ編" (保育社) には *Miccolamia* 属の日本産は2種とされカクコウカミキリとチビコブカミキリの2種が図説されているだけである (p. 144).

1973年の草間慶一博士の "日本産カミキリの生態と分布一覧表" (新しい昆虫採集案内, III, p. 123) の中には *M. (I.) verrucosa* はあるが *M. (I.) tuberculata* についての言及がない。

1973年中根猛彦博士は "チビコブカミキリとその仲間" と題して日本産の種に就いて図を入れ、交尾器を示されて検討をされた (北九州の昆虫 Vol. 19, No. 1:1-3, pl. 1). そしてシロチビコブカミキリ

はチビコブカミキリと問題点は残しているがやはり違うのではないかとM. (I.)tuberculata (Pic, 1918), M. (I.)verrucosa Bates, 1884, subsp. glabricula Bates, 1884の暫定的な処置をされた。

1984年の林 匡夫博士による“原色日本甲虫図鑑(Ⅳ)”ではM.verrucosaの図説はあるが(pl.25, f.22, p.124), シロチビコブカミキリについては解説のみであった。

同じ年の日本産鞘翅目学会編の“日本産カミキリ大図鑑”ではシロチビコブカミキリが美しく図説されている(pl.80, fig.541a, b, p.470).これによるとこの種の分布は本州, 四国, 九州となっているが兵庫県からの記録は空白になっている。

以上が大体本種に就いての筆者所有文献による現在までの分類学的経緯である。

生態的な報告もほとんど見ることが出来なかった。僅に同属のカッコウカミキリ, チビコブカミキリに就いて“図説長野県のカミキリムシ”の中に若干の説明を見ることが出来た(1976, p.168.1981, p.176-177), また最近発刊された小島圭三・中村慎吾両博士の“日本産カミキリムシ食樹目録”(1986)にもカッコウカミキリとチビコブカミキリの食樹は記録されているがシロチビコブカミキリは出ていなかった(p.162).

兵庫県下からは今までチビコブカミキリM. (I.)verrucosa Bates の記録はあったが(県北部地域のみ)このシロチビコブカミキリの記録は全く無かった(亜属は違うが同属のカッコウカミキリも県下の記録は少ない)。

1987年5月28日六甲山最高峰近くの山陽自然歩道の脇道でタンナサワフタギを網で拘って2 exs.のカミキリムシが入ってきた。帰宅後大図鑑で調べて見たらシロチビコブカミキリの541a京都府産♀(pl.80, p.470)に似たより白っぽいものであり色々検討して見たがシロチビカミキリに間違いないと考えられた。その後6月4日同じ場所で7 exs.採集, 6月10日は可成り注意したが1 exs.しか得られなかった(結局10exs.採集. 体長は4mmまでで一番小さいものは2.5mmであった)。兵庫県下からの記録が見当たらない種なので今一つ同定に不安もあり6月4日採集の5 exs.を林 匡夫博士に御送りして見て頂いた。その結果再検討の余地は残っているがシロチビコブカミキリと同定しておくと言う御教示を頂いた(2 exs.林博士保管)。そこでここに一応兵庫県下からシロチビコブカミキリを記録しておきたいと思う。

末文になり申し訳無いが同定して下さった林 匡夫博士に厚く御礼申しあげると共に採集に協力して下さいった蜂谷幸雄氏にも合せて御礼を申しあげる。

(AUG.1987)

## ヤノトラカミキリの記録

(兵庫県甲虫相資料・199)

高橋寿郎

ヤノトラカミキリ *Xylotrechus yanoi* Gressitt は県下では次の様な記録がある。

養父郡氷ノ山横行 [黒田, 1980, 1982], 城崎郡香住町鋸 [佐藤, 1981], 美方郡諾寄 [磯野, 1981], 浜坂町 [磯野, 1977], 鉢伏山 [遊磨, 1974], 扇の山 [辻, 1964, 岸田, 1972]。

いわゆる但馬のカミキリであり香住町鋸での多数の記録以外はそれ程数多く採集出来ているカミキリでは無い様である。1987年8月22日朝来町(朝来郡)の木材工場貯木場で小林桂助氏が1頭採集したと御教示頂いた。同じ但馬であるが割合南の方に位置する所であることと貯木場でミズナラ、ブナ、コナラ等の積んである所であったとのことで或は他の地域から運び込まれた材から発生したものかその辺のことはわかり兼ねるがそう多くないカミキリであるだけに小林氏の御了解を得て此処に記録しておきたいと思う。

同時に東 正雄氏から1972年7月30日鉢伏山で熱田氏が採集された1♀の記録を写真を付けて頂いている。鉢伏山の記録は既にあるのだが合せて報告させて頂く。

(AUG. 1987)

## ツヤハダクワガタ 氷の山に産す

(兵庫県甲虫相資料・201)

高橋寿郎

かつて筆者が兵庫県のクワガタムシをまとめさせて頂いた時(てんとうむしNo.8:141-152, 1982) ツヤハダクワガタ *Ceruchus lignarius* Lewis, 1883 の兵庫県下での産に就いてふれさせて頂いた。即

ち筆者の知る範囲ではツヤハダクワガタを県下から記録されたのは大上宇一氏の“播磨産甲虫類”（1907）の中でだけの様に思われる。この記録も詳しいデータが無いし同定について“松村博士の日本千虫図解による”とあるから同書第3巻, pl.45, f.42によってであると本種ではなくチビクワガタ *Figulus binodulus* Waterhouseと間違えられたのでは無いかと言う気がしないでもないとしておいた。その後筆者は寡聞にして本種の兵庫県下での記録を知らなかった。北部山岳地域にはどうもいるのではないかと常々考えてはいたが一。

最近（1987年6月1日）大阪の大築正弘氏から次の様なうれしい御教示を頂くことが出来た。

即ち箕面昆虫館に氷の山産♂のツヤハダクワガタの標本が展示してあったと言うのである。旧館の時のことで新館では展示されていないとのこと現在標本がどうなっているかわからない。詳しいデータが無く氷の山と言っても鳥取県側か兵庫県側のどちらかもわからない。とに角間違いなく氷の山で採集されたものがあったと、また友人の方も確認しておられるとのこと。

更にこの後6月4日送られて来た“昆虫と自然 Vol.22, No. 7”の中で田中正浩氏が“兵庫県のクワガタムシ”を発表しておられツヤハダクワガタについては田中氏自身氷の山で幼虫を採集されたが飼育に失敗し標本が無いと言うことと豊岡高等学校に氷の山産の標本があったことを記しておられる。いずれも氷の山での記録であるので氷の山に本種がいることは間違い無い様だがどれも詳しいデータが全くわからない。それと標本が残念なこととどこにあるのかはっきりとしないものばかりである。そこで但馬地域の同好者の皆サンの頑張りで確認して頂きたいものと希望すると同時にこの貴重な情報を御教え下さった大築氏への御礼の意味をこめて此処に一文をしたためた次第である。

(JUNE 1987)

## 県内学会誌・同好会誌・連絡誌紹介（1985-1987）

第13巻第2号以後県関係文献紹介を中止していた。一応1985年～1987年7月迄に出版された県内学会誌・同好会誌・連絡誌名を此処に紹介しておきたい（勿論紹介者の手許に届いたものだけの収録であり他にもまだあることだとは思っている）。尚県産昆虫に関する文献は大変多く甲虫に関するものだけを見ても結構ある（拙編文献目録追加篇I, 1984以後1986年末迄でも260篇ある）。これ等を紹介することは今の所見込めないが何等かの方法を考えたいと思っている。

兵庫生物 (兵庫県生物学会)

Vol.9, No.2(1986.2). Vol.9, No.3 (1987.1).

兵庫陸水生物 (兵庫陸水生物研究会)

No.20(1985.10). No.21(1986.1). No.22(1986.5).

No.23(1986.7). No.24(1986.9). No.25(1986.10).

No.26(1987.2)(この号よりワープロによる印刷に変わった). No.27(1987.5). No.28(1987.7).

伊丹の自然 (伊丹市立博物館)

第1号(1984.3). 第2号(1985.3). 第3号(1986.3).

第4号(1986.1). 第5号(1987.6).

てんとうむし (姫路昆虫同好会々誌)

No.10(1987.2).

姫昆サロン (姫路昆虫同好会連絡誌)

No.76,77(1985.9). No.78(1985.11).

IRATSUME (但馬むしの会々誌)

No.10(1986.5). No.11(1987.5).

昆虫ずかん (但馬むしの会連絡誌)

No.10(1985.11). No.11(1985.12). No.12(1986.1).

No.13(1986.8). No.14(1986.12). No.15(1987.1).

No.16(1987.4).

PARNASSIUS (淡路昆虫研究会々誌)

No.32(1987.4).

INSECT (淡路昆虫研究会連絡誌)

No.33(1987.4).

Crude(大阪昆虫同好会々誌)

No.26(1985.9). No.27(1985.12). No.28(1986.8).

No.29(1986.12). No.30(1987.7).

のせ (大阪昆虫同好会連絡誌)

Vol.14, No.2-10(1985.2-1985.12).

Vol.15, No.1-10(1986.1-1986.10).

Vol.16, No.1-7(1987.1-1987.7).

その他に久方振りに生物甲陽（甲陽学院高等学校、生物部）Vol.15(1987.4)が送られて来たが残念ながら昆虫に関する記事が見当たらなかった。

### お詫び

前第15巻第1号p.15のタイトル“ハラグロオオテントウの生活史”としなければいけない所編者の不注意で“ハラグロオテントウの生活史”と誤ったまま御送り致しました（発送の時わかったのですが一）。慎しんで訂正させていただきます。

著者東 先生並びに会員の皆様に深くお詫び申し上げます。

## 会費納入についてお願い

1988年度会費            2,500円

来年もなんとか継続して会誌発行をしたいと考えています。会費は丸10年間据置きでやって来ました。毎度申しあげています様に現在年2回の会誌の内1回分の印刷費が赤字という状況です。真に申し訳無いのですが来年度から500円だけ値上げして頂いて負担を少しでも軽くしてやって下さい（もう少し少々値上げをお願いしたいと思いますが原稿難の問題もあつたりしますので一）。

出費多端の折恐縮に存じますが会費納入を年内に同封振替用紙御利用の上お願い申し上げます。

## 編集後記

- お変わりございませんか。本年の結果はいかがでしたでしょうか。
- 今年は暖冬、春の少雨と異常続き、梅雨に入っても太平洋高気圧が弱く梅雨前線が南に遠ざかっていました。六月上旬やっと高気圧が強まり前線が南岸に定着。梅雨になると雨も例年以上によく降り（昨年より5-10%増しとか）、近畿地方の梅雨あけは7月24日（例年より一週間遅く、昨年より3日早いとのこと）でした。例年と違った気象条件のようでしたが虫の方への影響は如何でしたでしょうか。
- 私の方も身近の所で昆虫の調査・採集の機会に恵まれました。こんな所だと思いがけないものが採集出来て驚いています。やはり一見平凡に見える所でも初めてお目にかかれる虫が案外と多いのに感心したりしています。だから昆虫採集が止められないのでしょう。
- 会費値上げの件事情御賢察の上よろしくお願い致します。
- 本号も皆様方の御協力で発行が出来ました。16巻1号は1988年5月お手許にとどけられるよう頑張りたいと思います。多少にかかわらず御投稿の程を切にお願い致します。

(T)



---

きべりはむし 第15巻第2号

昭和62年11月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区水室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：(株) 文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11

---